

第70号

昭和55年11月25日

内容

座談会・大学はいま……そして
 社会に開くとは……………1
 第110回大学共同セミナー……………6
 法人ニュース……………8
 運営委員会の発足にあたって……………8
 事業部だより……………9
 わたしたちの合宿……………9
 千人会……………10
 寄贈図書……………5, 12
 利用状況……………11



発行

財団法人 大学セミナー・ハウス

《所在地》

東京都八王子市下柚木(〒192-03)
電話 0426-76-8511~3
振替口座 東京 5-74590番

編集

大学セミナー・ハウス
企画室

編集・発行人 岡山 猛
製作 中央公論事業出版

「大学セミナー・ハウスの初心を想う」座談会を、飯田宗一郎名誉館長ほか、その設立に関係され、またその後の育成・発展にご協力いただいた方がたに先日おねがいをしたところです(前号掲載)。今日はいわばそのあとを受けつづぐワスのあり方をめぐって、現に学生と学園生活を共にし、ここを利用してくださっている先生方の、現場からの声をいろいろおきかせたいと思います。宇野先生には先日の座談会にもご出席いただきありがとうございますので、まずご紹介ねがい、そこからお話をすすめたいと思います。

宇野 前回の話合いです、中心点は創立期の精神、その継承と発展というところでしたが、飯田名誉館長のクエーカー教徒としての精神的覚醒からはじまって、出会うの丘の意味、異質の者が出会うというところによる開かれた発想、創造の精神といったものが、まず飯田さんを中心に語られました。そのあと、それがどんな発展過程をたどったか。ちょうどそれがいわゆる大学紛争と並行して進んでいたので、そうした状況のなかで、教師と学生とのふれ合い、あるいは教師同士の交わり、このセミナー・ハウスがどんな役割を果たしたか。それが今日までの発展をもたらしたことの意味あい、さらには今後の社会との関係、また世界との関係のあり方などが語られました。

岡山 開館十五周年を記念して、「大学セミナー・ハウスの初心を想う」座談会を、飯田宗一郎名誉館長ほか、その設立に関係され、またその後の育成・発展にご協力いただいた方がたに先日おねがいをしたところです(前号掲載)。今日はいわばそのあとを受けつづぐワスのあり方をめぐって、現に学生と学園生活を共にし、ここを利用してくださっている先生方の、現場からの声をいろいろおきかせたいと思います。宇野先生には先日の座談会にもご出席いただきありがとうございますので、まずご紹介ねがい、そこからお話をすすめたいと思います。

そこであらためて考えたのは、たしかに大学セミナー・ハウス創設の理念は今後も継承したいし、いいものは残していきたいが、これを発展させるためには、入ってくる学生がどうなのか。学生が相当変わってきたのではないか。現在の学生の求めに 대응するには、われわれはどういう対応を考えねばならないのか。そんなことをもう少し話合ったほうがいいのではないか。それが今日、会合をもった趣旨だと思います。

大学の制度化の中で岡山 では、どなたからでも、ど

座談会

大学はいま……そして

社会に開くとは

●大学セミナー・ハウスの明日を考える

うぞご自由な発言を……。

横田 セミナー・ハウスと大学の問題を考える場合、長期的展望と、それに含まれる不滅の理想の二つの側面があると思えます。長期的な展望に立てば、大学とセミナー・ハウスは究極において同じことをめざしていると思えます。すなわち真理を求め、学問を追求するということに熱意と関心をもつ人びとが集まるところとです。ところが、なぜ八王子

設の理念は今後も継承したいし、いいものは残していきたいが、これを発展させるためには、入ってくる学生がどうなのか。学生が相当変わってきたのではないか。現在の学生の求めに 대응するには、われわれはどういう対応を考えねばならないのか。そんなことをもう少し話合ったほうがいいのではないか。それが今日、会合をもった趣旨だと思います。

にセミナー・ハウスができ、ここまで発展してきたかということを考えて、いまの日本の大学の置かれていた状況の問題性を補充するような形でセミナー・ハウスが出てきたように思えます。具体的にいこうと、これまでは大学間の壁が非常に厚かった。大学の制度化が進みすぎて、本来の学問が横に置かれ、単位とか成績とか試験とか、形式を重視する大学になってしまった。そこで、学問というのはこんなものではないのではないかと疑問が教師にも学生にも

宇野 重昭 成蹊大学教授

鶴見 和子 上智大学教授

村上 陽一郎 東京大学助教

横田 洋三 国際基督教大学教授

司会・専務理事 岡山 猛

起きてきたわけです。そうした学問への潜在的な求めが人びとを八王子に向かわせたんだらうと考えます。八王子では時間も限られて、テーマも限られ、人も限られて、るのですけれども、そこには制度化から解放された真の学問の追求の姿が見られるのです。それが大学セミナー・ハウスの意義だったのですね。

にセミナー・ハウスができ、ここまで発展してきたかということを考えて、いまの日本の大学の置かれていた状況の問題性を補充するような形でセミナー・ハウスが出てきたように思えます。具体的にいこうと、これまでは大学間の壁が非常に厚かった。大学の制度化が進みすぎて、本来の学問が横に置かれ、単位とか成績とか試験とか、形式を重視する大学になってしまった。そこで、学問というのはこんなものではないのではないかと疑問が教師にも学生にも

そこであらためて考えたのは、たしかに大学セミナー・ハウス創設の理念は今後も継承したいし、いいものは残していきたいが、これを発展させるためには、入ってくる学生がどうなのか。学生が相当変わってきたのではないか。現在の学生の求めに 対応するには、われわれはどういう対応を考えねばならないのか。そんなことをもう少し話合ったほうがいいのではないか。それが今日、会合をもった趣旨だと思います。

大学セミナー・ハウスは医者のようなもので、大学のもつていた病気を一つひとつ治してくれた。しかし、まだまだ治らない病気が大学にはありますね。

鶴見 たいへんいいことをおっしゃってくださいました。大学セミナー・ハウスが現在の大学のもつている困った面を補うという形で独自の仕事をしてきた、そして、困った部分が変わってきたら、それからへの対応も変わらねばならないというご指摘に私も同感です。そうしたお話を乗せて感想をいわせていただければ、まず大学同士の縄張りというものは、すでに学生が破っていますね。もうモグリ学生が自由に横行しているんですから。そして、これはとてもいいことだと思えますね。モグリ学生は単位を要求しないでよく勉強

してきた。この状況変化を正しく読みとらなければセミナー・ハウスの将来は考えられないと思います。たとえは、大学間の壁にしても、国際間の壁にしても、その後の教師同士、学生同士、学校同士の交流によって大きく破られつつあります。大学独自のセミナー、さらにはインター・ユニバーシティ・セミナーの動きも、場所は八王子を借りることが多いとはいえ、自主的な形で、ずいぶん活発になされるようになってきました。ですから、これまでのプログラムをただ充実させていくだけでは本来の発展は望めないと思えます。つまり今日の大学がかかえている別の問題、たとえば大学と社会との関わりのような問題にも目を向けていかなければいけないというように考えます。



鶴見(左)、村上の両氏

しますよ。ゼミでも、ちゃんと発表して、論文書かないと、ここに置かないわよ、というのと、よく勉強して、みんなより厚手のものを書いて持ってきてますよ。

宇野 先生、モグリ学生を見つけたら、そうおっしゃるのですか。

鶴見 見つけるんじゃないわよ。向こうから名のり出るのよ。(笑)

講義を受けさせてくださいって。村上 私ゼミもいま半分以上がモグリ学生ときもありませんよ。(笑)

触媒の役割

鶴見 いまの大学教育で私が一番気になっているのは、社会に出た人たちが、それも大学を出た社会の人でなくて、義務教育を終えてすぐ社会に出た人たちと大学生との関係、そして私たちとの関係ということですね。双方が対等で交流

し合える場、それをどこでつくつたらいいのか、困ってるんですね。別々な形でグループはあるんですけども、学生が働く人のことを議論する場合、それは抽象的な姿としてしかないんですね。働く人は働く人同士でしか話合っていない。私は両方に顔を出して、ここではこう、そこではこうと、自分でかみ合わせていくのは面白けれども、両方が直接ぶつかり合う機会もなかったら、それはきっと大学生のためになる。ただし、社会人はそれほど大学生から学ばないんだと思うけれども。

宇野 そう、それはいえませんが。

鶴見 私たちだってね、招かれて話をさせて、本当に悪いみたいな感じがしますものね。本当に求められる、いつもを私たちは与える気持ですね。調査がめらめらいうのと違うんですね。調査にいくっていうときは、相手を物体としてあつかうんですから。そうではなくて、対等な人間としてチョウチョウハッショとやる、これは大学のなかではできないんですよ。コミュニケーション・カレッジというものはありますが、これは社会人のためのカレッジなんです。

そこで大学セミナー・ハウスが一つの触媒の役割をもっていると思うんですよ。ただ、何と何との触媒かという、取り合わせが違ってきたつあるのじゃないか。私は、社会人と大学生を、どうやって同じテーマのものと、対等に議論させ合うかというのが、これからの課題じゃないかと思えますね。そこで気になるのは、大学セミナー・ハウスが社会人に対し

て、はたして制度的に開放されるかどうかという問題ですね。というのは、私の頭にあるのは何なに企業なんかには属する人ではないんですね。たとえば農村にはたらく人たちがいます。かれらがどういう資格でセミナー・ハウスに入ってきて、学生と同じグループをつくれるのかえらく気になるのよ。

宇野 それは大学教育のためにもなるんですから、制度的にも可能性はあるんじゃないんですか。

岡山 現在も共同セミナーなどで同人参加を認めるか認めないかが問題になってますし、これからの方向として、いまおっしゃられたこと、積極的に考えていくべき課題だと思います。

鶴見 もう一つ、国際的交流の面ですが、これはすでに各大学でよくやるようになってきてますし、大学セミナー・ハウスとしては、もっと長期に泊りこんでやるセミナーとか、学者レベルの交流でなく、ここでも向こうの社会人とこちらの学者、学生、あるいは社会人同士の話し合いの場をつくらんとかいったことを考えていくべきではないかと思えますよ。

カミシモをぬいだ安らぎ

鶴見 最後に、もう一つよくわからないことだけれども、これから大学セミナー・ハウスはどこへ行くのか。それをいうには、まず私たちのために、そこがなぜありがたい場所だったのかを考えてみる必要がある。はじめ、すべての組織は小さいもの、フニャフニャしたものなんです。それが大きくなって、だんだんに固まる、いかにすれば制度になるので、大学というのがまさに制度化された存在なんです。それが、セミナー・ハウスに来ると、制度化したものにたない、フニャフニャした、あたはたない、ある種の雰囲気がある。そこはまだたしかにあったんですね。そこで私たちがカミシモを解くわけですね。大学教授といった格好でなく、人間として、真理をつかむ、真実を求める、とことんまで議論し合うという姿勢で、そこに行くわけですよ。そして、ぶつかり合い、だんだん夜も更けるにつれて、火花が散り、そのうち想が浮かんでくるといった経験をするわけですね。対立を対立として、とことんまで推しすすめていくことができるという安らぎがそこにはあるんですね。それは一体なんであるのか、それがなくなったら、セミナー・ハウスは私たちにあって意義がない、とそこまで考えると、やはり飯田(宗一郎)さんというパーソナリティの存在に到らざるをえないんですね。飯田さんがしょっちゅう出張していた、私たちをもてなし、くつろいだ場所、自由な雰囲気、思想をただかわけする意味での自由、もっとも自由だけをドメで、そこに各人の動機づけを十分に発揮させるような、そんな雰囲気をつくってくださった。そういう個人的なものを、これから制度をととのえていくであろうセミナー・ハウスが、いかに継承し、発展させるかが当面大きな課題だろうと、私は思うのです。

宇野 前回の座談会にも、この問題はちょっと出ましてね。制度化されたら死んでしまっても、それが大学セミナー・ハウスにはあるんだという……。

鶴見 まったく秩序がなければ混乱ですけれども、野放図さがなければ存続できないと、私はいいたいの。これは私の信念ね。

村上 さっきの鶴見、横田両先生の発言で、かつて大学セミナー・ハウスがやったことを今は各大学がやっているというご指摘、お二人とも大変恵まれた大学にいらっしやる。

鶴見 それは私も認めます。

村上 そういふふうに恵まれている大学が、学生の側からいっても教員の側からいっても、まだまだたくさんあると思うのです。そこにまだ目を向けておく必要があるんじゃないか。その意味では、大学セミナー・ハウスはまだ今までの役目も果たし続けねばいけないと思っております。

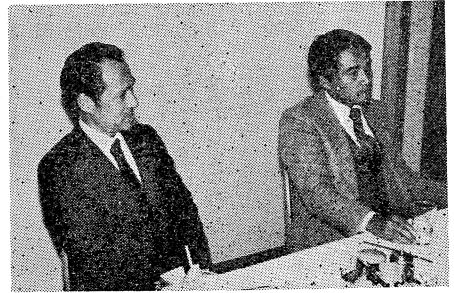
それから、それとは矛盾することになりますが、鶴見先生の最後のことばには私も同感で、組織というのはいくらもあつあつあるときにもっともウォルタージが高いのであって、それを維持するようになってしまつては終わりに近い。極端にいえば、やめてもいい……。

宇野 ただし、いったん出来あがつたものをこわすということはずかし問題ですね。

村上 ハードな組織になればなるほど、こわすのはむずかしいけれども、そこであえて理想論をい



されたら死んでしまっても、それが大学セミナー・ハウスにはあるんだという……。



宇野(左), 横田の両氏

えは、これから何を大学セミナー・ハウスに期待するかというのではなく、もしできるなら、われわれに何ができるだろうかという姿勢、発想を私たちは求められているのではないですか。

宇野 そう、これからの大学セミナー・ハウスが悪い意味でも固まってしまわないために、われわれがどう新しい大学セミナー・ハウスの形成に参加できるかということですね。今までの成果を継承しながら。

横田 成果の継承ということですが、学生たちの意識の変化、価値観の変化に大学セミナー・ハウスは一つの重要な役割を果たしてきたといえますね。かつてのような大学間のライバル意識、他大学に対するある種の差別意識が現在は少なくなってきたという。そこには、セミナー・ハウスで、いっしょにセミナーに参加し、議論し、飲み食いする間に、それまで他大学に関して持っていた先入観や偏見が消えていったことの影響、そ

れの社会への投影が見られますね。今の若い人たちは、そういう意味で、たいへんさめているし、それは大変いいことだと思いますね。大学や学部で人を評価するより、人そのものに着目するようになってきていると思います。

大学はいま……

岡山 だいぶ具体的なご意見が出てきたところで、現在の大学、大学の学生、教師についてどう見るか、お考えをきかせていただければ……。

横田 率直に言って、今の大学は大学本来のあるべき姿をもっているかどうか、疑問に思えます。学問の内容や実力よりも学歴や資格、特定の性別や国語が先行する

今の教師の登用制度、学生に批判されて怒るおかしな教師、教室には出るけれどもロクに質問もしない学生、それらを見てみると、さつきから話に出てくる社会人との接触が大学人には一つの大きな刺激になることはたしかですね。

村上 最近自分が訳した本にちょっと面白いものがあるんです。アメリカの学会の話なんです。それがどういふふうに出て来たり、どういふふうに出て来たり、実際に比喩的に書いてあるんです。ムカデの脚の脚が面白いという人が出てくる。一四対目でもなく一六対目でもなく、一五対目が大事だという。(笑)アメリカには物好きがいて、ムカデの一五対目の脚の同好のグループができ、やがて友人誌をつくる。それがもう少しふくらめて学会誌に昇格する。そこにムカデの脚の研究が発表され、紹介され、学会誌仲間

の引用頻度が増すにつれて、学会外からも注目され、活発な活動を評価される。そうすると政府もこれを無視できなくなるため、ムカデ研究者を食べさせるために、ムカデ保存会をつくる。社会は社会でムカデ保存のためのダンス・パーティを開く。(笑)そういう社会のサポートによって、各大学にムカデ研究の講座ができ、やがてこの大学院生のためのポストを用意しなければならぬというわけ。つぎつぎに自己増殖をしていくことを皮肉られているみたいで……。(笑)愕然としましたね。

横田 本来の大学とはいえない大学が自己増殖しているというのは事実ですね。

村上 ただ、社会が要求するものだけを大学が社会に対して用意すべきだと考える必要はないと思えます。私は、学問というのはつねに遊びだと思っています。

学問と遊び



鶴見 遊びに徹底すればいいわけよ。今の話はもう遊びでなくなっている。自己増殖することによって遊びでなくなっている。はじめの人はすごく面白いと思ったにちがいない。あの人はもう面白いという動機づけがなくなると、トクになるといふ意識だけでしょう。

宇野 さて現実には、今の大学院生のうち、学問は遊びだ、自分が燃えるからやっているんだという人が果たしてどれくらいいるんでしょうか。

鶴見 学生のなかにだつてどれくらいいるかしら。

横田 だいたい大学セミナー・ハウスは、大学の先生にとって遊びでしかありえない。正直いってお金もそうくれるわけではないし、金銭的にいえば全く割が合わない。しかし、割が合わないからむしろ遊びができるというアイロニーがあります。八王子に来て何が楽しいかという、やはり学問的刺激ですね。学会で得られない楽しいものがあるんですね。しかも例外的な奇特な人というには余りにも大勢の人が八王子に来ていて。そこに何か学問とか大学の本質にかかわる問題があるように感じますね。

宇野 大部分の学生は遊びではなくてきていて、ある意味では型にはまった利害関係が頭にあつての計算でできています。そういう学生に今ここで語られている遊びの意味はわかってもらえるでしょうか。

横田 私は、学生はよくわかっていて、遊びは遊び、学問は学問だと思えます。学生は実は大に、教室での勉強のためにきていない、遊びにきてるんですよ。先生は真面目に授業をやっているつもりでいますけれども、学生は単位をとるためガマンして授業に出、レポートを出し、試験を受けている。しかし、それはこれらの主観としては大学における主な活動ではないんです。正規の授業には適当に出て、そのあと、作業には自由な創造力を発揮する時があるわけですね。写真クラブだとか、グリーンクラブだとか、いろんなクラブに入ってやっている。そ

こで学生たちはものすごく多くのものを学んでいるんですよ。遊びながら学んでいるんですよ。

宇野 それは、いま私たちのいう遊びとはちょっと違うように思いますが。

横田 私は同じだと思っているんです。ただ違いが出てくるのは、正規の授業とか学問には一定のきまりがあるわけですね。どういふふうにも物事を説明し、実証し、理論を組み立てていくかというきまりがあり、それがだんだん複雑になり、近よりがたくなっていくんですけれども、学問の出発点は好奇心であり、興味であり、遊びであったと思います。昔の大学者は単位をとろうと思つて一生懸命勉強したわけではないと思いますね。コペルニクスにしてもアルキメデスにしてもソクラテスにしても、かれらの学問はやはり遊びだと思ふんですよ。

なぜ、いまの学生たちにそういうものが大切かという、学問のたのしき、トランプをやるのと同じたのしい気持、面白いからやるという、そういうきつかけを高校までの教育が殺していると思うからです。大学に入って、はじめてクラブ活動でそれが出てくるんですよ。クラブ活動といつても、先生方よくご存知のあの国際問題に関する九大セミナー、あれを見てご覧なさい。学生たちは正規の授業の時よりよっぽど生き生きと学問をつたえているんですよ。今日の大学の正規の学問・教育にはないんですよ。

鶴見 そうなの。

横田 ですから、そうでないとこ

ろ、エキストラ・カリキュラムのところで、かれらは学問の一番入口のところを体験しているといえます。

宇野 大きな目で見て共通なものがあり、相当程度重なり合うところまで賛成なんですけれども、それでももう少しゼミのなかで遊んでくれないかね。あるいは対話のなかで遊んでくれるとか。ただ今の状況のなかでいうと、勉強に背を向けて遊んでいる傾向なきにしもあらず……。

鶴見 夢うつつも好きですけどね、好きなものがうらやましい。学問が好きで好きでたまらない人もいますし、お金もうけが好きで好きでたまらない人もいます。(笑)

宇野 金もうけは大学ではできないから、大学のなかではやはり学問なり、なんなり、大学でできるものを好きな人でない……。

鶴見 そういう人だけが来ればいいのだけれども、なかなか来ないということなのよ。

教師と学生の間

横田 それで、大学に入ってクラブ活動ではじめて好きなことをはじめるんですか。私がいいたいのは、それがどうかかりだということ。それをどういうふうな学問的なものに指導していくかが先生方の工夫のしどころなんです。が、学生が多すぎるし、そんなことをやっていたら先生が倒れてしまう。だからやはり制度に流されて、決まった時間を講義するだけに終わるということになってしまふのです。

村上 教師と学生との関係にしても、遊びにルールがあるように、

立場の違いによるあるルールを守ること教育の少なくともある面はうまくできる。形式的にはあるルールのなかで話が行われることが一番能率的であることも認めねばならない。ある意味では、いやでも九〇分でも一二〇分でも教師の話をきくために坐っていることは決して無意味ではないと、私は思うんですけれども。

横田 ところが、このごろの大学の先生のなかにはどこぞご大学のステータスを求めるのが主目的で、その目的にかなうように専攻分野を決めるといふような人が出てきている。そういう例を見ると、今の大学の学問の姿はたいへん荒廃していると思いますよ。求めるのは学問ではなく有名大学の教授というステータスなんです。

鶴見 学生の求めるのも遊びでなく資格である。だから両方関連しているわけ。

横田 そういう先生が果たしてどんなふうな学問的感化を学生に与えるか、疑問ですね。

鶴見 ですから、セミナー・ハウスはこれからも、つましくやっつけてほしいんです。地位もお金も与えたい。そうすれば来る人も自然淘汰されて、学問が好きで好きでたまらない人だけが集まることになりまふよ。

宇野 横田先生のお話では、今の学生諸君は、ほんのちよつとした動機づけときっかけさえあれば、遊びの意味はわかっているし、集まってくる、というんですね。

横田 私は、そういう人たちがかなりあちこちに散らばっていると思うんです。基本的な知識の面では世界の大学の水準にひけをとらない、ものすごく高いものをもっている。しかし、動機づけだけはものすごく低い。その動機づけがかるうじてクラブ活動や課外活動のなかで行われている。しかし、正規の制度はそういうものを生かす方としたいなと思うのです。学生たちはそのことをよく知っていると思いますよ。

変貌した学生タイプ

鶴見 動機づけの面ではむしろ低下していますね。大学セミナー・ハウスの初期のころ、ちよつと学園紛争のころだけ、あのころの学生はもつぱら動機づけを求め、ぶつけ合うためにセミナー・ハウスにきた。勉強して来ないで動機づけだけを議論し合うので本当に困った。何回でも相手を吊り上げる。それに比べると今の学生はまったく隔世の感だわ。本当によく勉強するの。どうしてそんなに勉強するの、と聞くところ、ほかにすることないわってというの。私たちに学生なんかは本当に勉強熱心なほうだけれども、勉強でもしましよか式の学生はすいぶん多いのではないかしら。勉強熱心だけれど、すごく空虚なのよ。やはり空洞化ということでしょうし、こういう傾向は六〇年代より今のほうが進行していますね。

横田 おそらくそういう学生は学校を卒業すると勉強もやめますね。教える人がいて、制度のなかで勉強しなさいといわれて勉強する。だけれども、大学から社会へ出たあと、そういう人が創造性を発揮して、教わった大学の教育や社会の体験を乗りこえて発展していくかとなると、疑問です。



鶴見 それなのにそういう人が大学院でやめないで大学院に来るので。そういう人が試験に通って、逆にすごく学問への動機が高くて、これはと思う人が落ちちゃ。つまり語学で落ちちゃ。本当にジレンマなんです。大学院に入ってきて、さて先生、何をしましょうっていうから、それこそこっぴど困っちゃう。(笑)

村上 今の学生の、いってみればシラケというもの、なにか燃えないというところですね。これすべてマイナスと私は思いません。シラケてる者にも実はある役割を期待しているわけですよ。自分が燃えてると錯覚している人間ほど恐ろしいものはないし、皆が燃えて一丸となっている時の社会ほど恐ろしいものはないという意識を私は持っているんです。学問にはたしかにどこかで灯がともらなければならぬし、それがいつともるかもわからない。早い話、さっきいった、九〇分坐っていないければ、燃えてる先生の灯も見えないわけです。そういう意味で、制度としての大学はあつたほうがいいという意見なんです、実は私はいね。そして、ついでに灯が見つからない人は見つからなくてもいい、みんなが学者になる必要は毛頭ないんですから。しかし、ただセミナー・ハウスはちがう。ただ九〇分ガマンして授業に出ましたは困るんです。

鶴見 大学があるからセミナー・ハウスがある……。(笑)

横田 大学それぞれに個性があるの。で一概にいえませんが、このところ学生が年々おとなしくなっている。私たち講義しながら実は喰いついてくるような学生を期待してらんです。私の講義を、壁が音を吸収することく静かにノートにとつていく。質問ありませんかといって。質問あり。それで、わかっているのかどうかと思つて書かせると、私がいってことはキチッと書いている。だから決して勉強していないわけではない。けれども私がいった以上のことを書く学生はほとんどいない。これが大学かとする空しさを感じるものがよくあります。

鶴見 それはちがうわ。私のところなんか、パンと来ますよ。反論が。あしたもあの問題、どう結着をつけようか、頭が痛いよ。

横田 それはすばらしいことですよ。

鶴見 すごいから……、私の読んでないものを読んできて、教えてくれる。

横田 先生の場合は特別なんではないですか。

鶴見 もっとも挑戦してくる内容が変わってきましたね。昔は道徳的な挑戦で、価値の問題とか動機づけの問題で挑戦してきた。最近では実質的な知識の内容で挑戦してくる……。

宇野 私の場合、価値観が多様になつてきて、違った発想をぶつけてくる。ただ、これはゼミです。
鶴見 私のほうは講義ですよ。パン、パンと来る。私の講義が穴だらけだから。(笑)
宇野 私は挑戦しないから。(笑)

鶴見 ただ私の場合、講義は入りがいいけれども、試験は入りが悪い。つかまえてきくと、どう書いていいかわからないという。だから自然、面白い学生だけが残るように淘汰しているのかも知れないわ。

宇野 そういう学生にとっては大学セミナー・ハウスはあまり必要ないのかも知れない。(笑)

横田 そう、そういう学生は一人の先生に満足できないで、他の大学に盗聴にいったりしている。つまり開拓精神が旺盛なんですね。ただ一般的にはさつきいったような傾向が見られますね。どうも、共通一次、偏差値の制度がマイナスにはたらくいて、面白い学生が入って来ないようになってい

る。

社会人と大学人と

岡山 ここで、さつき出された社会と大学、社会人と大学の交流のあり方についても少し議論を進めていただければ……。

宇野 われわれはたしかに大学セミナー・ハウスなんかで、大学と社会とのつながりの場を求めたいと思うのですが、どうでしょう

か、社会の人は果たしてわれわれ大学人とのつながりを求めているんでしょうか。

村上 最近も経験したことですが、ある国際的かつ学際的な会合でコミュニケーションできる仲間はいかとうと、かならずしも同じ言語をしゃべる仲間ではなく、同じジャーゴン(専門語)をしゃべる人たちからですね。ある領域指向があるからわかりあえるという、ある安心感が、言語の障壁をこえ

て成り立ちうるんですよ。逆にいえば、われわれは日常のコミュニケーションの場でいかにジャーゴンによりかかっているかというところで、社会人と大学人といった場合も、現状では、すでにこえがたい部分が出来あがってしまっている



横田 「社会人の人は大学人とのつながりを求めているか」という宇野先生が出された設問自体が大学的発想のように私には思えるのですが。大学人、社会人の両者に共通の関心事項をそれぞれの考えのなかから取り上げ議論すればいいのではないですか。

宇野 私のいった意味は大学の人間のほうだけ一方的に思い入れを通してダメだということですよ。共通の関心事項に両方から肩を入れるということとはまったく同感です。われわれのやっている水俣の共同研究なんかはまさにそうです。

鶴見 そうなんです。共同セミナーも、これからは問題設定の段階から一緒に参加してもらってやったらいい。大学でやっている問題なんかは最初から答えがわかっているようなものだけども、こちらにはちがう。答えが出せそうもないから困っているのよ。具体的にはまず八王子の地元の人たちとも共同してはじめてみるようなことから……。

横田 私のとぼしい経験からいっても、社会人の場合、あいまいな答えを許さない、せっぱつまった

切実感がある。それに比べて大学人は実社会のことを、何もわかっていないんですね。その意味では社会と大学の共通問題を扱うとすれば、企画の段階から社会人に参加してもらうことによつて、大学人の常識からは出て来ないような問題が見つけられるのではないのでしょうか。

村上 今のお二人のご発言に、ある意味で一〇〇%賛成ですが、ある意味で八〇%反対なんです。というのは、幻想かも知れないけれども、もしも社会人が大学に何か大

学的なものや学問探求の場、交流の場として生きていってほしいし、そのための社会への開放であるべきなんです。この灯をともしつづけるためにどうしたらいいか。これをわがむずかしい課題だと思

います。ここが官僚機構化するようなことになったら終わりですよ。岡山 同感です。体質的にのりこえていかなければならない問題だと思っ

ています。ではこの辺で……。いろいろと率直かつ具体的な話をうかがえて、ありがたうございました。(昭和55・10・22)

よ。だけど、ここはちがうのよ。資格をとる必要もないし、そんなことを考えてもみない、たとえは農村の人たちと日常生活における人間同士の交流をはかろうとする。これは目的がちがうんです。

村上 そこで宇野先生が出された問題、大学セミナー・ハウスのなかの大学の部分に、そういう人たちは何を求めるかが、重く問われてくるわけですね。

鶴見 大学セミナー・ハウスはさつきから出ていって、制度化された今の大学に失われがちな遊びの場、学問探求の場、交流の場として生きていってほしいし、そのための社会への開放であるべき

なんです。この灯をともしつづけるためにどうしたらいいか。これをわがむずかしい課題だと思

います。ここが官僚機構化するようなことになったら終わりですよ。岡山 同感です。体質的にのりこえていかなければならない問題だと思っ

● 寄贈図書 (その1)

55年3~5月

- 「早稲田社会科学部研究」20、「早稲田人文自然科学研究」17
- 早稲田大学社会科学部学生会
- 早稲田大学総長室広報課
- 「早稲田フォーラム」28・29
- 坪井 実殿
- 「復眼」51
- 新しい大学観の創造「動きはじ
- めた大学改革」エリートの大
- 学・大衆の大学」
- 天城 勲殿
- 大内 力殿
- 「旅びと」
- 柳父園近殿
- 「学問と党派性」
- 河田喬夫殿
- 「精選幼児教育・社会福祉法規の
- 解説」
- 「現代におけるイスラム」
- 中村廣次郎殿
- 馬場伸也殿
- 「カナダの政治」
- 寺東寛治殿
- 「実証・現代企業の戦略行動」
- 寺東寛治殿
- 「野口明画集」「旅と画」
- 村上光雄殿
- 「古典の知恵袋」「イソップ寓話」
- 小堀桂一郎殿
- 「西欧の正義・日本の正義」
- 若槻泰雄殿
- 「シベリア捕虜収容所」上・下
- 笠原正成殿
- 若槻泰雄殿
- 「安楽死論集」4
- 村上直殿
- 「わが町八王子」
- 日本科学協会殿
- 「採集と飼育」4・5
- 立教大学殿
- 「立教」93
- 国際交流基金殿
- 「国際交流」23
- 国際交流基金殿
- 「現代天文百科」
- 寿岳潤・森本雅樹殿
- 「英米文学評論」26・1
- 東京女子大学英米文学研究室殿
- 「会誌」30、「人文論集」XVII
- 早稲田大学法学会殿

第110回大学共同セミナー

主題—藝術のたのしみ 劇的なものを求めて

— 演劇と映画のドラマ、その歴史・鑑賞・実際 —

期日—昭和55年7月11～13日

△全体講義▽

いま演劇とは

△ゲスト講演▽
学習院大学教授 岩淵達治氏
シェイクスピアの魅力

△セクション演習▽
劇団俳優座演出家 増見利清氏
△スタンストラフスキー・システ
ムとメイエルホロドの演劇論

△劇団芸芸演出家 丹羽文夫氏
われわれの時代にとって演劇
とは何か

△早稲田大学講師 西村博子氏
演劇と音楽劇との出逢い

△演出家 寺崎裕則氏
映画のドラマツルギー
△映画評論家 白井佳夫氏

E 演劇の歴史を考える—鑑賞と 研究の立場—

慶応義塾大学教授 宮下啓三氏
△運営委員 宮下啓三氏
△参加学生▽77名(内女子39名)

早大(慶大(各7)、東大(6)、明治
大(5)、共立女大(4)、埼玉大、東
外大、日大、立教大(各3)、筑波大、
一橋大、ICU、東京理科大、相模
女大(各2)、千葉大、東京医歯大、
信州大、静岡大名古屋大、大阪大、
学習院大、工学院大、杉野女大、成
蹊大、成城大、玉川大、多摩美大、津
田塾大、東経大、東女大、日女大、武
蔵大、武蔵工大、同志社大(各1)、
その他6 計34校

「藝術のたのしみ」をテーマに
したセミナーが最初に開かれたのは
昭和49年、以後三回を重ねて、
今回は四回目、一回・二回とその
運営にあたられた宮下氏を今回も
企画・運営のご指導に仰いで、こ
こに実現の運びとなった。

今回は演劇と映画、それに歌劇
やオペレッタをもふくめて、まず
まず多様化の一途をたどりつつあ
る現代演劇の実態をさぐることを
通して、ドラマ性をもつ芸術の存
在意義を改めて認識しなおそうと
いう意図をもって企画された。

「私たちの生きる現代はむやみ
と刺激にみちいて、人々は感動
することを忘れ、芸術の意義がう

とんじられているように思われが
ちだが、そうであるからこそ、人
間が言葉と肉体によって意志を通
じ合えるものだというところを、あ
らためて認識する場をもうどうで
ないか」という呼びかけに発する
ものである。

第一日目、あいにく梅雨空模様
のつづく中、定刻15時、講堂での
開講となった。「みなさん、おは
ようございます。現在15時37分、
どんなに遅い時刻でも、演劇の世
界ではいつもおはようございます
が、あいさつです。決して今日は、
とか今晩は、とかいうことはをつ
かわない。同じように、お疲れさ
まが別れのあいさつで、さよなら
とはいわないのです」。

宮下教授の軽妙な司会で、さっ
そく指導教授全員による共通セッ
ションがはじまる。それぞれ、芝
居つくりの体験、見聞をぶちまけ
て、話題はたちまち現代演劇のか
かえこんでいる本質論に及ぶ。

丹羽氏が劇団芸芸でのプロ経験
から発して、現在にはむしろ非リア
リズム演劇に興味をもち、その学
習を通して逆にリアリズムの本質
を追求したい、表現の幅をもっと
広いものにする、その可能性をさ
ぐってみたいといわれる。その発
言はたちまち、リアリズムとは何
かをめぐる活発な論議をよぶ。

西村氏は日本における近代劇移
入以後の創作劇、そのドラマツル
ギーを研究テーマに選んだいきさ
つを述べながらも、現在のアンダ
ラ演劇、前衛劇にふれ、もともと
彼らはリアリズムから出発したは
ずで、問題は、従来、まず戯曲が
上であり、その下に演出家がお

り、俳優がおり、つぎに観客がい
るといった、そういう思考の構造
にあるのであって、それを本来の
姿に立ちもどって考えてみよう
というのが彼らの本意だとされる。
寺崎氏は文学座に入団以来の職
場遍歴を語る中で、歌舞伎への興
味、さらには日本のオペラへの興
味と絶望、やがて東ドイツの演出
家フェルゼンシュタインへの師事
と傾倒、そして土から生まれた芸
術こそ本物で、それはオペラであ
り歌舞伎などであって、そうした
伝統芸術をどう現代化するかが、
われわれの当面の問題だとする。

またリアリズムが演劇のすべての
基本で、リアルな演技、ナチュラル
な演技は演劇を成り立たせるた
めの絶対条件であって、その面
での外国における基礎教育の徹底
ぶりを強調される。

白井氏はまた、リアリズム論の
おもしろさを述べ、とくに日本映
画の特殊性として、最初は演劇の
影響下からはじまった映画が、や
がて音響が入り、カラーが入り、
立体化することによりリアリズムに近
づいていった。黒沢明の時代から
東陽一らの時代になって、いまよ
うやく映画界にもルネッサンスが
きたのだと、明日への期待を述べ
られる。

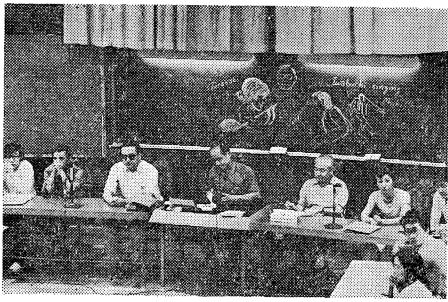
宮下氏は以上四氏の話のうけた
形で、いまの話はもっぱら芝居つ
くりの立場からの発言だが、観る
側からは別の見方があるはずだ。
リアリズムと逆行するかもしれない
が、様式化されているから安心
して観ている面が十分あるように
思う。そこをめぐる演出家の苦
悩を、たとえば「ハムレット」の
せりふ、福田恒存とか小田島雄志

の苦心をあげて説明される。
以上は二時間におよぶ共通セッ
ションでの指導教授五氏の発言の
一端であり、後段、具体例をあげ
てのリアリズム論議は聴講の学生
に多大の刺激と啓示をあたえた。

第一日夕刻後と第二日午前のセ
クション演習I・IIのあとをうけ
て、午後、岩淵氏による全体講義
「いま演劇とは」と増見氏のゲス
ト講演「シェイクスピアの魅力」
がティー・タイムをはさんで行わ
れた。

岩淵氏は氏特有の早や口で、一
時間余にわたり、説き去り、説き
来たり、まことに息つくひまもな
い能弁をもって聴衆を魅了した。
前半、別掲要約のような現代の演
劇状況についての鋭い分析を展開
され、後半は岩淵氏がその強い影
響下に演劇論を組みはじめたとい
われる作家フレイトの立場を、作
品「コーカサスの白雲の輪」など
を手がかりに具体的かつ精密に説
き明かし、全体講義の名にふさわ
しい総括的展望と問題提起をわれ
われの前に示された。

一方、増見氏からは氏の俳優座
における多年の演出経験、中でも
シェイクスピア劇との取っ組み合
いを通してはじめて語りうる豊富
な話題をひきだしたえたのも本セ
ミナーの収穫の一つといえよう。岩
淵氏の話のうけて、こわれない芝
居、既成演劇に対するある時期の
演劇界をおそった造反さきわにふ
れ、そうした状況の中でつねに上
演レパートリーの中のトップを占め、
言葉が信じられない時代の代表劇と
して生きつづけているシェイクス
ピア劇の秘密とは何か、それはい



右より丹羽、西村、増見、白井、宮下、岩淵、寺崎の諸氏



「いま演劇とは」などという表題にしたが、これは実は私自身が演劇を論ずるうえで感じていた疑問を解決する糸口を見出したため、自問自答である。

いま、演劇をいう場合、「演劇」と「別な演劇」というふうな分け方をしてみよう。普通、新しいものが出てくるには、先行の現象をこわして出てくるが、日本にはそれが無い。たとえば新劇は旧劇の反指定であつたはずだが、現在それらは別のものとして共存している。そしてまた、新劇でも旧劇でもない「別な演劇」が出現したが、前のものはこわれずにそのまま存在している。むしろ、どんどん増殖して、まるでヒドラのよう

だ。「別な演劇」「もう一つの演劇」というものがまた一つではなく、おのがじし自分の立場を主張し、無数に存在するのである。かくして、もはや演劇を一つの概念でくることができなくなっている。

50年代の新劇にはイデオロギー的なものを共通項として一枚岩の結びつきがあつた。それが60年代になると、やれペシメスティックだとかやれ展望がないとかいわれるが、非常に強固なコードをもこわしながら「別な演劇」が出てくるようになった。いわばコードの侵犯がそこにあつた。

現代的状态としていえば、ドラマがだんだんドラマとして成立しなくなつた。基本であるダイアローグがまず成立しないという問題

がひとつ。つぎにストーリー、さらにはドラマツルギー、そしてことばのコード。これがつぎつぎ犯されてこわされていく。最後には役者が肉體で字を書くといわれていくような、演劇のイリュージョンの破壊である。

しかし、そこで「演劇」と「別な演劇」とを分ける一番の境界線は何かということになるが、それはいわゆるメッセージの問題ではないかと思う。

▼全体講義から

いま演劇とは

岩淵 達治
(学習院大学教授)

本の新劇の場合、それはイデオロギー的発言、しかもある共同の志向をもつた団体とかかわりをもつ政治的発言だつたといえよう。ところが今、もしメッセージというものがあつたら、それは非常に収斂したもの、個人のメッセージということになる。

50年代終わりまでの演劇ではテーマがない、何を言っているのかわからないといわれることが恥だつた。しかし、今の若い演劇人は、テーマ主義だとか啓蒙的といわれることにすぐ恥入るらしいし、そこに一つの逆転が見られる

わけだ。60年、70年の二度の安楽を経て、集団的なものに対する挫折などがあり、それらによるものだろうと思う。

ところで演劇にはメッセージだけでなく、エンターテイメントという要素もある。50年代の演劇がいわばメッセージだおれで、これでは面白くない。そこでエンターテイメントということばが出てきたわけだ。かくして古い芝居のルールを破り、なしくずしの中で「別な芝居」が存在権を得ていった。こんどは観る側がそれに馴れて異和感をなくしていく。

最近では駄洒落によって観客を現象的によこばすのが一般的になり、パロディが抜けて、駄洒落が自己目的になつてしまつている。違う言語行動の世界にはじめから抵抗なく入っていく若い人なども多く、私には抵抗がある。やはりメッセージを伝えたい、わかつてもらいたいという原罪のようなものが私にはある。

「夢の脈絡」といわれるように複雑なドラマツルギーをもつ作品を読み解こうとするとき、場当たり的な駄洒落があまり先行すると伏線や象徴的なコードがかくれてしまい、邪魔されてしまう。

最近古い人の中にもエンターテイメント志向が強くなり、ばかげた論が堂々と潮歩している。エンターテイメントが先行し、笑いというものが悪貨となつて良貨を駆逐してしまつているのが現状なのではあるまいか。

どういふ演劇運動であれ、運動自体はメッセージなのである。

(文責・編集者)

(前ページよりつづく)

つも現代によみがえりうる、いわば現代との接点たりうる古典の強さだと説かれる。そして世界の演劇家たちが、それぞれどんなふうにかシエイクスピアに向き合つてきたかを、かつてイギリスで採集したさまざまな舞台のスライドを写しながら、その歴史的な移りゆきを具体的に飽かせなかった。

岩淵、増見両氏の講演のあと、学生諸君との懇談に入り、話はブレヒト、シエイクスピアから泉鏡花、唐十郎、玉三郎などと、興のおもむくところ果てなしの感があつた。

夕食後、セクション演習Ⅲのあと、21時より1時間半、ふたたび講堂に参集、各指導教授を中心

に、グループ演習あり、個人芸あり、さすがは芸術セミナーの名を冠するにふさわしい見事な即興劇の競演となり、一同夏の夜のたのしみを満喫した。

◇

第三日、最後のセクション演習を終えた学生諸君は寝不足の疲れもものは、11時講堂に参集、全体集会に入った。この三日におよぶセミナーの総括質問であり、総括答弁である。ここでは指導教授の答弁のごく一部を要約する。

丹羽氏——演劇になぜかわるかの質問には、好きだからという以外に答えようがないけれども、演劇は本質的に他人にかかわる仕事で、そこに興味がある。メッセージをどう伝えるかの先に、問題は本当にいいたいことがあるかどうかだ。いいたいことは伝わるものだ。また、現代を描くには悲劇

よりも喜劇のほうが伝えやすい、これは私の実感だ。

西村氏——なぜ演劇か。小山内薫が「生きたいからであります」と答えたことがある。いいものとの出合いを尊重したい。意識が変えられるといった経験はないが、驚きはあつた。これからもできるかぎり多くの舞台を観ていきたい。

寺崎氏——オペラについていえば、歌には制約があり、不自由さがある。制約の中でどう自己表現をやるか、そこに芸術のすばらしさがある。たとえば指揮者がいる。俳優は指揮を見てないようで見なければならぬ。芸術における束縛と自由、これが芸術の秘密だろう。人間って一体何だろう、これをどう問ひ、どう見つめるかがメッセージとなる。

岩淵氏——演劇の多様化にもかかわらず、観客が固定され、オーブンになりえない現状の指摘は重要だ。ただ、すべての人に開かれた芝居など、現実には不可能だ。メッセージの問題だが、フラストレーションの解消よりはむしろ背筋が寒くなるようなものを、観た人にしこりを残すものの方が大事だと思ふ。

増見氏——リアリズムをつぎつぎつめていけば、あたえられた時間、空間の中でいいたいことを表現するために、何をどう省略するか、いわば省略法だともいえる。

「ハムレット」の中に出てくるけれども、芝居というのは自然に対して鏡をかかげ、時代の様相を映し出すことだ。ナチュラルが必要で、オペラは禁物だ。

白井氏——映画の側から見ると

(次ページ4段目へつづく)

法人ニュース

運営委員会の新しい発足

明日のセミナー・ハウス建設のために

理事会、常務理事会とは別に、理事長の諮問機関として、大学セミナー・ハウスの運営一般について審議し、意見具申する委員会制度の必要はかねてから指摘されており、55年6月6日の第43回理事会における寄付行為検討小委員会(委員長加藤一郎氏)報告にも提案され、その具体化を常務理事会に一任されていたが、同年7月30日の常務理事会において、その設置が正式に決定され、同日ひきつづき、その第一回会合が開かれ、法人運営当面の諸問題につき活発な意見の交換が行われた。

初代の委員には理事長の選任、委嘱により左の六氏が就任した。

- 東京大学教授 加藤一郎氏
早稲田大学教授 川原栄峰氏
国際基督教大学教授 三宅 彰氏
上智大学教授 鈴木 皇氏
成蹊大学教授 宇野重昭氏
中央大学教授 崎田直次氏
また委員長、副委員長には加藤、川原両氏がそれぞれ選任された。

当日、理事会で承認された「大学セミナー・ハウス運営委員会規則」の要点をひるえば、①委員会は大学セミナー・ハウスの将来計画および運営につき、理事長の諮問に応じるとともに、必要に応じて理事長に意見を述べ、②委員は一〇名以内とし、理事長が選任、委嘱する。任期は二年、ただし再任を妨げない。③必要と認めたと

きは委員以外の者、または大学セミナー・ハウス職員の意見の聴取、資料の提出を求めることができる。④必要に応じて分科会を設け、分科会に臨時委員および専門委員を委員長は委嘱しうる。

第二回運営委員会は同年9月6日、大学セミナー・ハウスで開かれ、キャンパス内の諸施設を視察、その補修・改善策、将来の施設拡充策などを議題に意見の交換と具体的検討を行った。

運営委員会の発足にあたって

運営委員会委員長 加藤 一郎

ご報告が遅れましたが、55年7月30日の常務理事会で、大学セミナー・ハウス運営委員会の新設が決定されました。そこで、ひきつづき開かれた運営委員会の第一回会合で、私とその委員長をお引き受けするようになりました。

このような運営委員会の必要性は、かねてから感じられていたことです。大学セミナー・ハウスの方針の決定は、理事会と常務理事会によつて行われますが、会員大学の学長を中心とする理事会は、年に二回程度しか開くことができず、機動性に欠けるおそれがあります。現在は、緊急事態に対処するため、常務理事会が活動していますが、多忙な方々に集まってい

ただくのは容易ではありません。他方で、セミナー・ハウスの実動的な委員会としては、共同セミナー委員会と国際プログラム委員会がありますが、それらはそれぞれ担当プログラムの企画・実施のために館長の諮問委員会として設けられており、財政、建築等、セミナー・ハウス全体の運営に関与するものとはされていません。

こうしてみると、理事会と共同セミナー委員会等との中間に、大学セミナー・ハウスの運営一般を審議する運営委員会の必要性が浮び上つてきます。それは、具体的にいえば、理事長と専務理事を助けるものになるはずで、54年理事会によつて設けられた寄付行為検討小委員会は、55年5月の最終報告で、一方において寄付行為の改正は当面必要がないとしつつ、他方においてこのような運営委員会の新設を提案しました。

私はこの検討小委員会の委員長を勤め、運営委員会の設置の提案をした者として、委員長就任は適当でないと考えたのですが、発足して軌道に乗るまではやってみよう、ということでしたので、お引き受けすることにしました。

私がセミナー・ハウスを最初に利用したのは正式の開館前でしたので、ずいぶん長いおつきあいになります。大学セミナー・ハウスが種々の困難を乗り越えてさらに発展していくように、運営委員会としても努力をしていくつもりです。どうかご助言やご援助をいただきますようお願いいたします。

* * *

(前ページ5段目よりつづく)

演劇はまだ観念的、様式的すぎるように見える。映画の俳優は実際に空や海や山や川や動物や、何やかやと競演しなければならぬ。映画はエンターテイメントとして面白くダイナミックに世の中の矛盾を明らかにし、テーマをつきあげていくことが、小説や演劇よりもやれる媒体ではないか。

最近の日本映画はとかくえらい文学的原作を持ってきて、えらい俳優がつくりつけの話ばかりやっている。そうではなく、もっと日常的な、単純なことを直線的なシネマツルギーで映像化してほしい。日本人は大局論、組織論、全体論をやりすぎる。もっと小さな、日常的な世界を徹底した具體的映像主義で描いていくとき、それを透かしてもっと大きなものが見えてくるだろうと、期待している。

宮下氏——演劇の現場にいる立場からでなく、文学の一ジャンルとしての戯曲を讀者として味わう立場からアプローチしてきた私としては、むしろ脳裏にえがかれる舞台上で作品を実体化する権利を主張したい気持がある。演出のいかんを問わず、作品が主張するものを追い求めたい。その上で演出のいかににより加変な部分も、だれがやろうと変わりえない部分への確信がないと、讀者の作業は不可能だ。それが作品自体のわれわれへのメッセージだと理解する。そして文学を排斥する部分はある。歌舞伎、能、狂言から新劇、新

派、新新派、アングラ等々、現在はまことに多様であり豊かだ。ただこの豊かさは一つの貧困をはらんでいる。それぞれが狭いタテ構造の中にあつて、それへの個人個人の対応のしかたに貧困がある。中でも演劇が大都市文化の中にあつて、地方文化にないのは明らかに貧困のあらわれだ。

以上、三日間にわたる第110回大学共同セミナーでの話題の一端を紹介した。

「省略、省略、なおかつ時間超過になりましたが、そこに演劇のふくむ豊かさがあり、セミナーの存在証明があると思います。欲求不満は大いに結構、この欲求をどう満たすかにあなたがたの未来の課題がある。未来をもちうることを楽しみなながら、会を閉じたいと思います」との宮下運営委員のことばで無事閉講。食堂での送別昼食会を最後に14時すぎ解散した。

法政大学技術連盟GLCによる植樹——左端は横山勝信教授



事業部だより

55年8・9月

●8月1日夏休み型の利用

8月の利用は、例年7月以降に見られる「夏休み型」。日本国際学生協会主催の第27回国際学生会議などの国際的な集会、英語教育協議会(ELLEC)や語学教育振興会(COLTID)主催の語学集中訓練など全国規模の研究集会在は、全国各地の大学の学生が多数参加しているのである。また、これらは五〇人から一五〇人といったグループで、滞在期間も二泊以上最高八泊にもおよび。したがって、ゼミ合宿の多い他の月に比べて出入りの動きこそ少ないが、この月は連日二〇〇人から三〇〇人といった満杯状態が続いた。グループ数は計一〇四であるが、宿泊延人数は計七、六八三人。宿舍の利用率も九二%と開館以来の記録的な数字となった。もともと、この数字には次の注釈を必要とする。すなわちこの夏は、同じ多摩地区にある中央大と明星大の要請を受け、7月末からの約一ヵ月間、両校(後者は昨年に引続き二年目)の夏季面接授業(スクーリング)に出席するため全国各地から上京した受講生計一〇二名に、ユニット宿舎(定員二名)の一部を一室三人を条件に提供するとなった。この「スクーリング生」の利用だけでこの月は延一、八二一人に達する。当ハウスにとつて

は「娯乐的」な利用形態であったが、「仕事を離れて学習に専念できるのはこの期間だけ」ということから「勤労学生」に、当ハウスは「学習に好適な環境と雰囲気」を提供することができたのである。

この他、初利用のグループには、中国人留学生と在日中国人家族計一四〇名が参加した東京台湾教会の「留学生夏季集会」、現在二〇歳前後になるサリドマイド被害者の相互交流と学習を目的とする「いしずえセミナー」などがある。なお、後者は北は北海道、南は沖縄から車椅子使用の肢体不自由者、手話に頼る聴覚障害者を含む計七〇名が参加しているが、参加者はこの丘の坂道、セミナー室への階段などを相助け合って克

◆技連GLCの行事

法政大学教授 横山 勝信

法政大学学生会技術連盟(略称技連)の夏季グループ・リーダー・キャンプ(略称GLC)が八王子の大学セミナー・ハウスの森の中で初めて行われたのは昭和四二年七月のことです。それから、今年でも一四ヵ年もお世話になったことになりました。本年のGLCは通算で二〇回目。例年のように三泊四日の日程を終了し、感慨ひとしおのものがあります。法政大学の全学生を会員とする学生会は体育会、応援団、文化連合など七団体からなっています。技連がこれに加わったのは昭和二八年のことです。技連は傘下に

服、キャンプファイヤーやフォークダンスなどを楽しみ、無事三泊四日の日程を消化して元気な姿で退館した。

●9月1日記録的なゼミ回数

8月末から9月にかけては、夏休み終了前後を利用した各大学のゼミ合宿が集中するので、その利用の姿は前月とは極めて対照的である。宿泊延人数は五、二八五人(うち会員校三、四九七人)、ゼミ回数の一四九(うち会員校一〇)は、これまで最も多かった昨年同月の一三〇を上廻る新記録である。

これらの合宿の中には、この季節の常連が少なくない。比較的大きなグループでは、一四〇人が三泊した法政大技術連盟のGLC。

これらの合宿の中には、この季節の常連が少なくない。比較的大きなグループでは、一四〇人が三泊した法政大技術連盟のGLC。これらの合宿の中には、この季節の常連が少なくない。比較的大きなグループでは、一四〇人が三泊した法政大技術連盟のGLC。

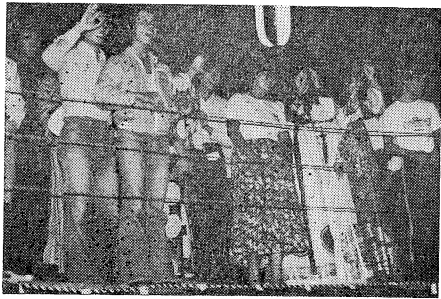
この林の中に鶯の聲が透り、夜は星空が美しく澄んで印象的でした。規律はかなり厳しく、食堂へは正装をして行くよう言い渡されたものでしたが、民宿などと異なり大学生としての行動を前提とした取扱いを受けて身の引き締まる思いでした。そのような雰囲気の中ではおのずから規律ある自主行動がとれ、この企画も大きな成果をあげることができました。初日の夜、本館の壁にひびが入るほどの地震に驚かされたことも忘れられません。あれから十数年、諸設備の整備とともにセミナー・ハウスが発展の一途をたどって。毎年ハウスの方々から温いお心遣いをいただき、このように安心して快適なGLCの合宿を続けられますことを私共は心から感謝いたしております。

今回は一四年目の利用である(別掲記事参照。津田塾大のITC(英語集中研修)も恒例の利用となった。今年も英語・国際関係両学科の三〇名が内外の教師陣と国際セミナー館に七泊した。一四七名が二泊の山梨英和短大英文学科のセミナーでは、今年も島田謙二教授が熱のこもった集中講義をされた。全学的に開かれた文学部企画のユニークな総合セミナーとして本紙第64号でも紹介した立教大の「集中合同講義」は48年以來連続の八回目。「現代日本の神話」をテーマとする今回のセミナーには七〇名(うち教師六名)が参加。四泊五日の集中スケジュールには高尾山への遠足も組み入れられていた。順天堂大「病院業務改善セ

ミナー」も当ハウス開催一二回目。同病院各部署の職員研修と交流を兼ねた伝統あるセミナーで、開会式では今年もかくしやくたる八四歳の有山理事長が一四七名の参加者にあいさつされた。今年四年目、東京理科大建築学科「建築計画ゼミ」の週末合宿には六〇名が参加、通常のカリキュラムを離れて「大学セミナー・ハウスの建築群一良い建築とは何か」などを討議した。また、この月は職員研修で会員校大学二校の関係者を迎えることができた。いずれも一泊の研修と懇親の集いで、一つは千葉大厚生補導研究会で各学部の関係職員計二六名が参加、二日目朝には約一時間にわたって全員が当ハウスの各施設を見学した。もう一つは津田塾大職員研修で計六一名の参加。大東百合子、東寿太郎両教授他当ハウスにかかわりの深い先生方も来館された。

●法政大技術連盟GLC

さて、本号の「わたしたちの合宿」紹介(別掲)には、前述のように当ハウスでの開催が一四年目という常連法政大学生会技術連盟のGLC(グループ・リーダー・キャンプ)に登場願った。今年の参加者は計一三一名。例年のように技術関係の「一研究會」機械・経営工学・計算技術・建築・高分子・自動車・生物・電気・土木・民家及び航空からそれぞれ一〇名前後の代表が参加している。講演会、自由討議、分科会としてキャンプファイヤーなど相互の研鑽と親睦のためのプログラムが盛り込まれた三泊四日の日程は、すべて自主・自律的に運営され、さ



盆踊り大会——やぐらの上で紹介される外国人学生たち

すが通算二〇回の伝統を思わせるものがあつた。なお、今回の開会式では、先同大工学部小金井キヤンパスから当ハウスへの池に寄贈された魚(鯉六〇尾・鮎三〇尾・金魚三〇尾)の目録の贈呈があり、また三日目(9月4日)には遠来荘の向いの丘で全員参加の植樹祭が行われるなど、第20回(当ハウス開催一四回目)のGLCを記念する行事も組み入れられた。これを機会にも、同技術連盟を育ててこられ、このGLCを第7回以降今日まで見守ってこられた工学部・横山勝信教授に別掲の一文をお寄せいただいた。

●キャンパス点描

8月2日II大学セミナー・ハウス「学生年輪の会」夏のつどい開催。一五大学・二一名が参加。オリエンテーリング、映画会、談話会等で交流し、また会報「年輪」第一号を発行して、不参加の会員へ発送した。

8月6日II広島原爆記念日の朝8時15分、構内放送により在泊者

は一分間の黙禱を捧げた。その間、教師館屋上には国際学生会議に参加の外国人学生を含む約七〇名が集合、文学教育研究者集団の研究會に広島から参加していた一名が飯田名誉館長とともに「真理の鐘」を点鐘した(別掲感想文参照)。

8月6日II4日から四泊五日で開催中の第27回国際学生会議(総合テーマは「エネルギー人類共通の課題」)、参加者は外国人学生二五名を含め計一〇〇名)を迎え、夕食後に「盆踊り大会」を開催。他の在泊グループ、八王子国際研修センター研修生、近隣の子供会など地元の人々合計約五〇〇名の参加を得て盛会。アジア、アフリカ、中近東、中南米、計二一カ国からの学生・研修生の紹介や、お国の歌の披露なども組み入れられた。

8月16日II東京理科大学・大澤綱一郎教授と同ゼミ出身者のリュニオン・セミナーが開催されたが、これに参加した九名の社会人全員が退館時に千人会入会の手続きをされた。たまたまこの週末、職員丹精のとうもろこしの収穫があり、同グループにも交友館でとりたてのとうもろこしの接待があつた。

8月24日II第四日曜日恒例の遠来荘茶道教室開催。都立大・桐谷維ゼミ、子どもとつくる生活文化研究会等の参加者計一三名が参加。

8月30日II夕食時の食堂は「グループ二五九名で、定員オーバー」だったが、席を譲り合ったところで全グループの紹介を行い、東京理科大・国分康孝教授から

「人間関係ワーク・シヨップ」(本紙第64号参照)の合宿についてお話をいただいた。

8月31日II都立大や早大のゼミで利用の多い千人員員・鈴木二郎教授はこの春造形大の学長に就任。この日は同大教員七名とともに二泊の合宿で来館された。

9月6日II9月最初の週末、夏休み終了前に合宿の二グループ・二一五名で活況を見た。夕食時に全グループを紹介して交歓。また、同日午後開催の当ハウス第2回運営委員会に出席、夕食を共にされた加藤一郎、川原栄峰、三宅彰、宇野重昭の四委員が岡山専務理事から紹介された。

9月9日II一橋大茶道部の七名が遠来荘での稽古のため合宿。高年齢の鮎川宗藤先生(千人員員)も宿泊して指導に当たられた。

9月23日IIお彼岸の中の日と仲秋の名月が重なった「秋分の日」。夕食時の食堂で在泊の八グループ(一一一名)が紹介され、月見だんごが当夜の各ゼミナール室でのおやつに配られた。

9月28日II遠来荘茶道教室に在泊の東京理科大「建築計画ゼミ」、日本山岳協会「海外登山遭難対策研修会」等より約三〇名が参加、民家でのお茶を楽しんだ。

八・六の鐘を打つ

—文教研「広島グループ」—

8月6日、午前8時15分。広島在住の私たちが打ち鳴らす「平和祈念の鐘の音」が、今年も大学セミナー・ハウスの木立ちを縫って響き渡りました。続いて、一分間の黙禱。

あの日を広島で迎えた私にとつて、この一分は二〇万の死者と対面する時です。人として許せないことをされたくやしき。人として許せないことを許してしまつた無念さ。これは、原爆による死者と私たちが被爆生存者との共通の感情のように思いますが、その怒りや悲しみが胸底深くからたぎり出てくる時です。では、そういう苦しく愚かしい過去をどうのりこえていけばいい

◆千人会

昭和55年8~9月

◇現在会員は一、六三五名です

大学生II 一、二七名
社会人II 四〇八名

◇新しく会員となられた方々

- 12名(第55回報告(申込順))
- 中央大学教授 崎田 直次殿
- 榊山製作所 伊藤意智郎殿
- 有本電器製作所 佐野 幹夫殿
- 赤井電機 柴田 誠殿
- 大興電子通信 中山 光雄殿
- 分光計器 太幡 祐己殿
- 産業科学 仙田 哲殿
- 静岡大学工学研究所 篠崎 啓助殿
- 大宮市立植竹中学校教諭 瀬田 裕司殿
- 江戸川区立葛西中学校教諭 橋本 智殿
- 早稲田大学非常勤講師 清水 雄二殿
- 神奈川大学教授 野沢 浩殿
- ◇会費ありがとうございます
- 55年8~9月(敬称略)
- 井上孝、川原啓美、山口重克、山井湧、長浜洋一、長野武、松山孝雄、原誠、鈴木成文、島園安雄、色川大吉

- 滝幸三郎、安藤良雄、伊藤清子、杉浦明、芥川龍男、稲田拓、小川信子、小林文男、藤井隆、菊池雄二、村上光雄、大蔵隆雄、穂山貞登、望月一憲、田中庄蔵、高村象平、石井竹松、坂本清、出淵博、菊池百合、伊藤一郎、小林正一、伊東一江、岡本剛、浅井那二、徳久球雄、佐野幹夫、柴田誠、橋本智、伊藤意智郎、瀬田裕司、中山光雄、太幡祐己、篠崎啓助、仙田哲、山岡喜久男、横田澄司、山本武彦、高村弘毅、佐藤誠三郎、原島幸太郎、時枝満康、島根範子、岡本哲治、志賀英、福井正紀、鮎川宗藤、小林祐子、原田行男、山本芳夫、加藤栄一、若槻泰雄、岡村文子、十代田知三、竹下敬次、佐藤豪、島山英雄、白浜謙一、福山仙樹、花鳥重春、後藤光一郎、柳下綱道、市川博、米山弘、中島文夫、中川重雄、小川圭治、児玉久雄、筑波常治、喜多勲、小田切松義、中村英勝、大倉謙二、山田耕司、石川馨、佐野晃、増田茂樹、片山清一、朽津耕三、渡辺昭夫、下田弘、藤永光之、武澤信一、藤井幸彦、市川節子、福島正久、村上陽一

郎、押田勇雄、宮坂宏、武藤英輔、橋本博太郎、松平文朗、松村信治郎、坂本義和、松尾登、松田徳一、永井克孝、谷俊治、藤田淑子、千葉正士、松田武彦、緒方真也、井深淑子、横山宏、麓信義、三村卓雄、泰本融、後藤米夫、岩崎不二子、黒田まゆみ、小堀桂一郎、小堀巖、小林忠義、野沢浩、大沢綱一郎、町野朔、高村多賀子、小島達治、村松暎、宮野三郎、子安美知子、尾形憲、鈴木守、岡村甫、石村善助、鈴木忠義、栗原照子、宮川透、田端光美、金子靖、西村善四郎、田村康男、森岡敬一郎、小田切美文、吉利和、長津一郎、池上

矢内原忠雄全集を贈る

鈴木 皇
(上智大学教授)

開館十五周年を記念して矢内原忠雄全集(岩波書店)全二九巻を、この丘に集う学生諸君に贈ることにした。矢内原先生について私などが今さら申すまでもないけれど、先生が天に召されてからすでに十九年、したがって先生の警咳に接する由もなかった若い人達のために、簡単に先生のことを記しておく。

矢内原忠雄先生は、学者・行政者・信仰者として第一級の人であった。経済学者として、植民政策を研究し、その学問的成果は、太平洋戦争後、米国の占領地行政の基礎資料となったと伝えられる。今日、わが国で国際経済、国際関係論と称される学問の分野は、先生の広い視野と深い学問にその源を発しているのではなからうか。行政者としての先生は専ら東大にあって、経済学部長・社会科学研究所長・教養学部長(初代)・総

秋彦、鞍馬菊枝、鹿島健次、佐藤康胤、関本昌秀、西川潤、平井久、森川和久、岡野澄、柴田愛子、内ヶ崎賢五郎、河野恵、東寿太郎、佐久間徹、新井勝敏、伊能敏、加藤一郎、森口繁一、米松安晴、山科高康
 ◇会費に添えられた言葉を拾う
 誕生のお祝詞ありがとうございます。老人に深入りするのは好きではないけど、せいぜい気分を若く保って千人会の寿命を長くしたいと思っています。
 専修大学大学院主任 小田切美文

長(二期)として、的確でスケールの大きい措置をとり、戦後の混乱の時期に、学園の中ほとんど破壊を生じさせなかった。ただし先生は政府の行政には参画されなかつたので、それに応ずる榮誉は受けられなかつた。信仰者としては、青年時代に内村鑑三に私淑してより、全く純粹にキリストへの信仰に生き、信仰によって死に勝ち、その伝道の足跡と影響はきわめて大きかつた。そして先生は何よりも、国家の歩むべき道を示す予言者であつた。その指針は、戦中戦後を通じて、平和と民主主義であつた。平和がいかに実現しなかつたか、真の民主主義がいかに困難であるか、今こそ深く先生に学ぶべきであらう。先生の言がこの全集にある。

秋彦、鞍馬菊枝、鹿島健次、佐藤康胤、関本昌秀、西川潤、平井久、森川和久、岡野澄、柴田愛子、内ヶ崎賢五郎、河野恵、東寿太郎、佐久間徹、新井勝敏、伊能敏、加藤一郎、森口繁一、米松安晴、山科高康
 ◇会費に添えられた言葉を拾う
 誕生のお祝詞ありがとうございます。老人に深入りするのは好きではないけど、せいぜい気分を若く保って千人会の寿命を長くしたいと思っています。
 専修大学大学院主任 小田切美文

集会で使わせてもらいました。来春発行予定ですが、出来ましたら送本いたします。
 町田市役所市史編纂室 新井勝敏
 ♥
 ローターリー青年リーダーセミナーでは大変お世話になりました。
 国立市農業協同組合 佐藤康胤
 飯田前館長が播かれた一粒の種が大学社会でスタックと成長していくのを見るのは、まことに驚きであり喜びである。また我等に勇氣と希望を与えるものである。
 大東文化学園理事長 時枝満康
 選択——矢内原忠雄の生涯——が発行された。当時の理事長、石館守三先生の御好意によるものであり、編集の責任は私が負つた。矢内原先生はこの丘に登られることはなかつた。しかし学問と教育に心血を注ぎ、夢に見るまでに学生を愛しておられた先生は、この丘の上のセミナー・ハウスを嘉し給うであらう。そして何よりも、学生諸君が、ここに集つて、その時々問題を論じ交歓し、いそしむと共に、時としては、群をはなれ独り図書室にこもつて、矢内原先生の厳しい静かな文章に相對してもらいた。

全集の内容は1~5 植民政策研究、6~13 聖書講義、14~16 基督の信仰、17 短言、18~20 時論、21 教育・大学・学生、22 人生論、23 満州・朝鮮・沖繩、24 余の尊敬する人物、25 交友・追憶、26 私の歩んできた道、27 初期の文章、28 日記、29 書簡・補遺・年譜から成つてゐる。(一九八〇・二〇・二五)

カードありがとうございます。元気で六二歳の誕生日を迎える事が出来ました。感謝の気持ちのしるしとして送金させていただきます。主婦 伊東一江
 ♥
 4月1日付にて東京医科歯科大学(教養部)を定年退官いたしました。ただ今自宅を日本仏教研究所に致しております。
 日本仏教研究所長 望月一憲
 ♥
 この春、留学生との合宿で初めてセミナー・ハウスを訪ねました。とても気に入りました。益々発展するよう祈っています。
 慶応義塾大学教授 稲田 拓
 ♥
 また12月に学生とともにお邪魔するのを楽しみにしております。その節はどうぞよろしく。
 東京外国語大学教授 原 誠

利用状況

8月 (104グループ、延七、六八三人)
 ** 同月2回利用

- 千葉大学薬品製造学セミナー
- 慶応義塾大学教授 西山 武夫
- 成城大学助教 武蔵 秀彦
- 東京薬科大学第二薬理学教室 鷺見 洋一
- 慶応義塾大学助教 市川 惇信
- 東京工業大学助教 伊丹 邦夫
- 早稲田大学自動操作研究会 増田 久弥
- 東京理科大学教授 西川大二郎
- 慶応義塾大学鶴木研究会 小林 弘
- 東京大学助教 増田 久弥
- 法政大学教授 西川大二郎
- 東京学芸大学教授 小林 弘

- 中央大学社会福祉「青い鳥」大妻女子大学読書会
- 芝浦工業大学科学・技術論研究会
- 慶応義塾大学教授 ** 加藤 寛
- 明治学院大学教授 小野 哲郎
- 法政大学教授 白井 慎
- 東京理科大学教授 大澤綱一郎
- 中央大学教授 丸尾 直美
- 学習院大学助教 浅輪 幸夫
- 早稲田大学助教 宮寺 功
- 杉野女子大学講師 坂口 耕史
- 東京大学教授 森田 桐郎
- 国際基督教大学教授 井上 和子
- 成蹊大学助教 植村 栄治
- 東京大学教授 日高 八郎
- 東京大学RESSESシンポジウム
- 東京学芸大学社会科学教育研究会 桐谷 維
- 東京都立大学助教 若松 利昭
- 東京薬科大学合唱団 小泉 仰
- 中央大学講師 慶応義塾大学教授 千葉大学厚生補導研究会 児玉 久雄
- 学習院大学教授 永野 賢
- 一橋大学法学研究会 村上陽一郎
- 中央大学教授 斉藤 優
- お茶の水女大助教 黒田 淑子
- 東京薬科大学東葉祭運営委員会 国分 康孝
- 東京理科大学教授 明治学院大学高野・河合合同ゼミ 伊達 秋雄
- 法政大学講師 法政大学教授 古林 尚
- 慶応義塾大学教授 安藤 常世
- 東京都立大学講師 山川 仁
- 東京大学教授 木村尚三郎
- 中央大学通信教育部 明星大学通信教育部 八王子市立打越中学校剣道同好会 創価大学教授 林 巖
- 横浜市立大学助手 中島 清

学生年輪の会夏の集い	東京I・T・C	文部省総合研究班会議	日本国際学生協会	語学教育振興会	放送キャンベーン研究会	大学英語教育学会	半導体夏のゼミナール	日本生産士会	橋本治日本語講座	千葉市幼稚園協会	文学教育研究者集団	いしづえサマー・ゼミナール	東京リコーダー協会	東京都高等学校英語研究会	東京台湾教会	多摩地区看護研修会	英語教育協議会	国立医療センター看護研究ゼミ	子どもとつくる生活文化研究会	軍事史研究会	東京スクール・オブ・ビジネス	日本友和会										
一橋大学教授	慶応義塾大学英語会	法政大学助教授	駒沢大学講師	東京大学助教授	一橋大学茶道部	早稲田大学行政法ゼミ	津田塾大学I・T・C	日本大学助教授	神奈川大学助教授	東京大学教育社会学研究ゼミ	早稲田大学助教授*	早稲田大学若手研究者の会	法政大学助教授	学習院大学フランス会部	神奈川大学助教授*	一橋大学助教授	東京外国語大学助教授	学習院大学ゼミナール協議会	青山学院大学助教授	立教大学助教授	上智大学助教授	上智大学助教授										
細谷 新治	公文 溥	清水 卓	古畑 和孝	津田 正晃	曾我部 豊	川原 栄峰	兼子 春三	小山吉之助	坂本 義和	藤田 伍一	竹内与之助	門脇 卓爾	高橋 勇悦	長谷川浩一	武澤 信一	平井 久	武内 清	倉沢 進	大石 塘山	草津 攻	十代田知三	内山 政照	三宅 義夫	小野 哲郎	橋本 敏雄	清水 徹	鈴木 幸毅	五味 健吉	茂木 虎雄	浜内 謙	村越 邦男	
津田塾大学講師	東京大学教授	早稲田大学教授	慶応義塾大学熱力学研究室	青山学院大学教授	青山学院大学教授	中央大学講師	明治大学助教授	横浜国立大学助教授	立教大学助教授	武蔵 武彦	江夏美千穂	鍋島 力也	寺東 寛治	深沢 実	野沢 浩	木谷 弘子	荒井 良雄	宮崎 寛明	北野 弘久	竹前 栄治	高田太久吉	木村 喜博	成井 成一	宇野 重昭	石谷 行	村松 友次	相良 享	赤木須留喜	浦川道太郎	浅野 克己	長岡 亮介	
中里 明彦	奥平 康弘	清水 望	佐藤 節子	和男	原 正彦	繁多 進	渡辺 一民	武蔵 武彦	江夏美千穂	鍋島 力也	寺東 寛治	深沢 実	野沢 浩	木谷 弘子	荒井 良雄	宮崎 寛明	北野 弘久	竹前 栄治	高田太久吉	木村 喜博	成井 成一	宇野 重昭	石谷 行	村松 友次	相良 享	赤木須留喜	浦川道太郎	浅野 克己	長岡 亮介			
山梨英和短期大学英文学科	都立立川短大講師	城西大学教授	立正大学教授	フェリス学院大学教授	小塩トシ子	和田 明子	都留文科大學教授	東京神学大学修養会	産業能率大学助教授	山田 善靖	暁星学園教員研修	日本会計研究学会	日本山岳協会	日本基督教会東京中会青年部	高橋聖書集會	国際フォースクエア福音教団	西荻教会	東京都公立保育園研究会	町田の歴史編集委員会													

〔注〕 本号の「利用状況」では紙面の都合で企業関係グループ、個人利用、日帰り利用は省略させていただきます。

「金融経済181」金融経済研究所殿
「歌文集 烽火」 渡邊為好殿
「Encyclopedia Britannica」全巻 日本ブリタニカ株式会社殿
「子どもの教育と社会心理」 「独身のすべて」 寺内礼治郎殿
「公法理論」9 斉藤 寿殿
「日本の1980年代」 三輪公忠殿
「早稲田法学」55巻1・2 早稲田大学法学会殿
「国際協力」4・5 国際協力事業団殿
「会報」41 大学基準協会殿
「海外留学英会話」 「欧米語学留学資料集」他 九鬼 博殿

「日常生活の社会学」 山岸 健殿
「日本外交の選択」 「中ソ対立と現代」 中嶋嶺雄殿
「学業についていけない子の指導法」 神保正一殿
「幻想と悟り」 山崎正一殿
「十八世紀の精神」 「ルソー全集」 原 好男殿
「アジアの友」 8011~3
「Asian Book Development」
「ユネスコ・アジア文化センター」
「石田梅岩の思想」 今井 淳殿
「石油の真実」 深海博明殿
「エネルギー・システム」 「新エネルギー論」 「水素エネルギー」 太田時男殿
「南北問題」 「国際関係を見る眼」 西川 潤殿

● 編集後記

本号の発行がたいへん遅れたことをお詫びします。ひきつづき次号以下の編集に努力中で、早く平常な刊行ベースにもどすつもりです。ご了承ください。

前号に掲載の開催15周年を記念しての座談会のあとをうけて、これからの大学セミナー・ハウスのあり方について、日ごろ何かと親しくしていただいております諸先生から忌憚のないご意見をお聞きしました。読者のみなさんからも読後感など、おきかせくだされば幸いです。

前号にお願いしました飯田宗一郎氏慰勞券金に対してはさっそく各方面からご厚志をお寄せいただき、ありがとうございます。次号にご報告いたしますが、とりあえず御礼申し上げます。(岡山)

● 寄贈図書 (その二)

55年4~6月

「金融経済181」 金融経済研究所殿
「歌文集 烽火」 渡邊為好殿
「Encyclopedia Britannica」全巻 日本ブリタニカ株式会社殿
「子どもの教育と社会心理」 「独身のすべて」 寺内礼治郎殿
「公法理論」9 斉藤 寿殿
「日本の1980年代」 三輪公忠殿
「早稲田法学」55巻1・2 早稲田大学法学会殿
「国際協力」4・5 国際協力事業団殿
「会報」41 大学基準協会殿
「海外留学英会話」 「欧米語学留学資料集」他 九鬼 博殿